
頑張れ生徒会長！

市川かうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頑張れ生徒会長！

【Nコード】

N4559G

【作者名】

市川かうた

【あらすじ】

風鈴中学三年、生徒会長の八城くづゆ。なんでも出来る彼女は性格ゆえに友達が出来ないことを悩んでいた。そんなある日彼女に友達…。(前作『引きこもり副会長！』の別Ver.です)

（前書き）

この話は『引きこもり副会長！』という話の、くづゆ視点の話です。前の話を読んでいない人が読んで多分大丈夫だと思いますが、あくまでもオマケのような感じで書いたので、『引きこもり副会長！』を読んでからの方が分かりやすい（？）と思います。

いきなりカミングアウトするが、私は生徒会長だ。ほんの1ヶ月ほど前に就任したばかりのひよつこだが、仕事はきちんとこなしていると思う。

…ん？別にカミングアウトではない？そんなことは無いだろう。カミングアウトとは隠していたことを発表するということ、だそうだから、私にとってはカミングアウトだ。

ところで、私が生徒会長に立候補する、と言った時のクラスメイトは対して驚いていなかったな。それどころか笑いながら「やっばり！？」と言われた。

…何故だろう。

まあそんなことはどうでもいい。今は雑務を片づけなくてはならないのだ。

風鈴中学校は、生徒会およびその役員に生徒に関する雑務を任せるといのが伝統らしく、今もその伝統に乗っ取って生徒関連の雑務は私に任されている。

私に、という言い方はおかしいと思うかもしれないがこの生徒会室には私しかいないのでそれで合っている。

役員は生徒会長が直々に選ぶらしいが、私には仕事を任せられるような知り合いがいなかったから全部私がすることにした。役員の仕事はやっぱり地味なものが多いから、わざわざあまり親しくない人に頼むのも気が引けたのだ。

「ん…っ」

肩が痛くなってきたので、ゆっくりと伸びをする。机の上の書類は、最初の半分以下まで減っていた。

こういう仕事は好きだ。私には友人がいないから、放課後の時間

はまったくもって暇になつてしまふ。その時間を潰す趣味もない私には、この仕事は大変合つているとも思う。

「…やっぱり、友達は欲しいんだがな」

肘をついた右手に頬を預けて、小さくため息を吐いた。

私の性格ゆえか、頼りにされることはあつても放課後に「遊ぼう」と誘われることは無い。

もう少し中学生らしい生活をしたものだ…。まあ、こんなことを考えている時点で無理なのかもしれないが。

「はあ…」

再びため息を吐いた瞬間に、生徒会室の扉がノックされた。珍しいことに、来客だ。

「どうぞ」

書類に目を通すふりをしながら答える。聞こえるかどうか分からない程の音量で「失礼します」という声が響いた。

ぎ、と重そうに扉が開く。ゆつくりと身体を滑り込ませてきたのは丸眼鏡の男子生徒だった。胸ポケットのワッペンから察するに私と同じ三年だ。

「あの…相談なんですが」

弱弱しい声で呟く男子生徒はどうやら私に若干怯えているようで、少し寂しくなりながら私はなるべく優しく見えるよう微笑む。

「今、茶を淹れよう。そのソファに座っていてくれ」

「あ…は、はい」

何故か私と対峙する生徒は敬語が多い。同学年なんだからもつと打ち解けて欲しいものだ。生徒会長だから仕方ないのかもとは思つが。

茶色い革張りのソファに座る生徒にお茶を入れた湯飲みを渡す。

彼は小さく頭を下げてそれに口をつけた。

「で、相談とはなんだ？」

私も同じように口をつけてから傍の茶菓子を引き寄せる。男子生徒は俯いたまま眼鏡の奥から私を見つめた。

「えっと…僕のクラスメイトの話なんです、けど」

「クラスメイト？」

「はい。で、でも今はクラスメイトじゃなくて一年の時にクラスメイトだったってだけの話なんですけど…」

「ふむ」

男子生徒は何かを話そうとしたが、その前に顔を上げて私を確認めるかのように見た。

なんだ、と首を傾げると、彼が小さく呟く。

「生徒会長は、小さな相談にも乗ってくれるって…言っていましたよね、選挙のとき」

「ああ、言ったぞ」

「どことなくだらしないことでも、ですか？」

「勿論だ」

「本当に？」

何度も確かめてくる男子生徒に、私は微笑んだ。

「私に二言はない」

「…じゃあ、話します」

少し安心したように顔を緩めた男子生徒は、何度も茶をすすりながらぼつぼつと話し始めた。

その話を要約すると、なんと『私の』学校には不登校生徒がいるのだそうだ。

相談に来た生徒は昔その不登校の生徒に優しくされたそうで、そのことを感謝していて、もう一度学校に来てもらいたい、とのことだった。

卒業式がある三年生の一年間は中学校生活の中でもとりわけ大事だとは私も思う。

何の思い出もなく卒業させたくはないのだそうだ。

ふむ、心優しい生徒もいるものだな。

感心していた私の前で話し終えた男子生徒は、飲み終えた湯飲みを握り締めたまま座っていた。

そこで私はあることに疑問を抱く。

「…一つ聞いてもいいか」

「は、はい」

こういうことを聞くのはもしかしたらとても無粋なことなのかもしれない。

「その生徒は、どうして学校に来なくなっただ」

そう思いながらも問うた私に、男子生徒は一瞬固まってしまったのかと思うほど身体を硬直させた。

丸眼鏡の向こうの瞳が、見て分かるほどに動揺で揺れる。

「それ、も…話さなくちゃ駄目ですか」

「…無理にとは言わない」

私の言葉に、男子生徒は数分黙り込んでから、口を開いた。

「その生徒…多野くん、って言うんですけど…すごく、頭が良かったんです」

「優等生だったのか」

「いえ…まあ、優等生でしたけど、明るくて、クラスの中心みたいな人でした」

「ふむ。良い生徒だな」

率直な感想を述べると、男子生徒はまるで自分が褒められたかのように照れくさそうに微笑んだ。

なんとも素直な良い生徒だ。

「…でも、あいつらのせいで」

微笑んでいた男子生徒は、呟いた言葉のトーンと同じように暗い瞳で俯いた。

「あいつら？」

聞こえた言葉を反芻する。男子生徒は弱弱しく頷いた。

「多野くん、凄く目立つ人だったんです。だから、クラスの男子が気に入らないって言い始めて」

「…よくある嫉妬心から来るやつだな」

「はい。始めはその数人だけで多野くんを無視したりしてたんですけど、徐々にクラス全体に広がっていった…」

おそらくは彼自身も、その『多野くん』を無視してしまったのだろう。そうしなければ『多野くん』と同じ扱いにされてしまうから。そして今、いや、ずっとそのせいで不登校になった『多野くん』

に対する罪悪感のようなものがあつた…というところだろうか。勝手な推測だがあながち間違っていないだろう。

「多野くんが不登校になってしまった時には、もう遅かったんです」「典型的ないじめか。そしておそらく担任が戻そうとしたんだな？」

男子生徒は、口を開かずに首を縦に振って答えた。

「でも『多野くん』は戻ってこないまま…ということか」

私が呟いた言葉に俯いたまま何も言わなくなってしまった男子生徒。

自分がいじめられたわけでもないのに随分と心を痛めているらしい。本当に『多野くん』に感謝しているようだ。

私もこういう友達が欲しいものだ…などと考えながら、私はガラス張りのテーブルに湯飲みを置いた。

「そうだな。私は生徒会長だから、生徒の悩みを解決しよう」

男子生徒は不安そうに私を見上げた。…意外にも小さいな。いや、背丈の話なんだが。

「必ず、『多野くん』に学校へ来てもらおう。私の学校は、全校生徒および全職員そろって初めて『私の学校』となりえるのだから」

「あ、えーと…？と、とりあえず、お願いしますっ」

彼はあまり私の言いたいことが分からなかったらしいが、深く頭を下げた。

「任せておけ」

につこり微笑んだ私に何故か男子生徒は顔を赤くしながら頷く。

そしてその顔のまま立ち上がると、もう一度礼をしてから生徒会室を出て行ったのだった。

「さて…後の書類も片付けるか」

生徒会長としての初の大仕事となるだろう『多野くん』に万全の体制で挑む前に、きちんと仕事を終わらせなければならぬからな！

次の日、私はさっそく先生に聞いて『多野くん』の住所を突き止めた。

ちなみに『多野くん』は『多野奏』かなでというらしい。素敵な名前だな。

校門を出て、地図を見ながら歩を進める。ちなみに授業はサボった。きちんと早退届は出したからいいだろう。私は皆勤賞ではないし。

地図と一緒に持ってきた顔写真に書いてある名前をもう一度見ながら私は少しだけ羨ましく思っていた。

私は、自分の名前が好きではない。

『くづゆ』というのは、母親が好きだった飲み物らしく本当は「葛湯」と書いて「くずゆ」と読むそうだ。「ず」が「づ」になったのは母親の単なる趣味で、可愛かったから平仮名にもしたと聞いた。私も小さい頃はその名を気に入っていたが、小学校に入ってから途端に嫌いになった。

当時泣き虫だった私はよく男子にいじめられ、あだ名が「くず」だったからだ。

子供というのは何も考えずに人を傷つけることが多々ある。

中学に入った今では向こうも私に何もしないから、忘れることはしているが。

「おつといけない」

思考にふけていたせいか、曲がるはずの角を曲がり損ねた。

ゆっくりと戻って、道を曲がる。よくある住宅街で、似たような

建物が道の両端に並んでいた。

『多野くん』の家は少し奥のほうだ。

地図を見ながら進んでいくと、灰色の石に白く『多野』と彫られた表札が目に残る。

「ここだな」

確認してから、私は迷わずインターホンを押した。

…返事はない。

両親は共働きだそうで、今はお昼だからまだ家にいるだろうと思っ
て来たのだが。

もしかしていないのだろうか。そうすると、サボった分が見事無駄
になってしまう。

もう一度押す。しん、とした家の中から、乱暴に階段を下りる音が
聞こえてきた。

「ふむ、居留守を使うつもりだったようだな」

さすがは不登校だ。と、ちょっと外れた感心をしていた私だが、
一向にインターホンから答える声は聞こえない。

あくまで無視するつもりか、と少し乱暴に押した直後、がちゃ、
という音が聞こえた。

しかしその後は無言。どうやらこちらから仕掛けねばならないよ
うだ。

咳払いをして、気合を入れる。

「風鈴中学三年、生徒会長の八城くづゆだ。君は多野奏くんだな？」

数秒の沈黙の後、「はい」と小さく聞こえてくる。…なんでこい
つも敬語なんだ。

ふむ、まあいい。私はインターホンに向けて再度話しかけた。

「『私の』学校で現在不登校となっている生徒は君一人なのは知っ
てるか？」

『いえ…知りません』

声が少し不機嫌になった。おそらくは私の言い方が気に障ったの

だろう。

すぐに直せるものではないから仕方ないのだがな。

「そうか。ならそのことで話があるんだが…」

出来れば家に上げて欲しい、という前に、インターホンから返事が返ってきた。

『言っておきますが僕は学校へ行くつもりはありません、その話をするだけ無駄です。それじゃ』

ぶつ、という音と共にあつという間に切れてしまった会話。私は若干の苛立ちを覚えた。

人が全部言い終える前に切るとは何様だ。そもそも、『するだけ無駄』な話など無い。

「…こんなことで諦めると思ったら大間違いだぞ、多野奏」

玄関の門を開けて中に入る。このさい不法侵入などと言ってはいられん。

二階だろうと目星をつけた彼の部屋を見つけようと裏庭へ回る。下から見上げると、締め切った窓のカーテンが一部屋だけ揺れていた。

…あそこか。

この後私は二階の部屋の窓を叩き割って彼の部屋へ侵入するわけだが、どうかその方法だけは聞かないでくれ。

…ちよつと恥ずかしいからな。

「…なんのようですか」

勉強机の椅子に座った多野奏を、私は彼のベッドの上に座って見つけた。

ちなみにきちんと靴は脱いである。そこまで無礼ではない。

「君に学校に来てもらいたい」

「…お断りします、って言いませんでしたか」

「なぜだ」

あからさまに顔をしかめてカップラーメンをすする多野奏は、意外にも端正な顔立ちだった。

ぼさぼさの頭とよれよれのパジャマは気になるが、元優等生と聞いている通り人気の出そうな顔つきだ。

同時に、他の男子から妬まれるというのも分からなくもない。

ラーメンを一口食べ終えた彼は、むす、とした顔で私に向かって呟いた。

「……僕が学校に行かない理由を貴方に教える義務はないはずです」

「そうだな。まあ私は君の理由は知っているからいい」

「は!？」

私を知っているとは思っていないかったらしい彼は、途端嫌悪感を露にしたような顔で私を見つめた。

自分の嫌な過去を人に知られるのは誰だって嫌だろう。私も嫌だ。ため息を吐きたくなるのを抑えて、私は冷静な顔で口を開いた。

「私は生徒会長だからな。生徒のことは知る義務がある」

「義務、って…あんたそれプライバシーの侵害だろ!」

怒鳴る多野。ここで私も怒鳴り返したりはしてはいけない。

悪いことをしているのは明らかに私のほうだから、私は何も言わずに多野を見つめた。

「いきなり来て何なんだよ!僕が学校を休むのは僕の自由だろ!？」

「…落ち着け、多野」

「ていうか僕が休んでる理由知ってるならわざわざこんなところまで来ないでまずあいつらを何とかしてくれよっ」

多野が落ち着く様子はない。あいつら、というのは彼をいじめに陥れた奴らのことだろう。

「それは出来ない」

「何で！」

私に苛立ちをぶつけるように睨んでくる多野に、静かに答えてやる。

「私が解決したところで同じことの繰り返しだからな」

「……」

多野が沈黙する。

「私は、『私の』学校で不登校がいるのがとても悲しい。それが一人だけならなおさらだ。だから今日、私は生徒会長になって初めての大きな仕事を、君に学校に来てもらうことに決めたのだ」

「…僕は行かない」

ぐつたりと、何かを諦めたように椅子に座る多野を、私は見つめる。

私と視線が合った多野は、ゆっくりとそれを外した。

「今はそう思ってくれていて構わない。でも卒業までには来てほしい」

「…行かないって言うてるだろ」

多野はどうしても行く気はないらしい。

困った私は、とあることを思いついた。俯いたままの多野に声をかける。

「じゃあ、まずは私と友達になってくれ」

「は？」

多野が顔を上げた。友達、というフレーズに、私はつい顔が緩む。私と友達になってくれれば、友達が出来たことによって多野が学校に来てくれるかもしれない。それに、私にも友達が出来て、一石二鳥だ。

私はベッドから降りると、椅子に座ったままの多野の手を取った。そういえば、男子の手を取ったのは初めてだ。やっぱり、私の手とは違うものだな。

「なっ…な！」

手から多野の顔に視線をずらすと、多野は顔を真っ赤にして金魚

のように口を開閉していた。

「私の友達になってくれ。別に学校には来なくていい、とにかく私と友達になってほしいんだ」

「い、…いやだって言ったらどうするんだよ」

多野の答えに、私は少し寂しくなる。

「それは困るな。私の友達1号がいなくなってしまっ」

「…あんた、友達いねえの？」

私が言うと、多野は若干目を見開いて、少しだけ心配そうに聞いてきた。

一瞬クラスメイトの顔が浮かぶ。

「頼りにする生徒、というのは友達ではないだろう？」

「…でも、頼りにされてるんだろ」

「まあな。だが私は、普通に放課後に遊んだり、お茶を飲んで話せる友達が欲しいのだ」

「ふうん…」

視線をそらしながら小さく呟いた多野は、少しの間黙ったあと、口を開いた。

「別に…いいけど。友達くらい」

思わぬ返事に、私のテンションが上がる。

「ほんとか!？」

「え、いやっ、違ッ」

「ありがとう、奏!」

「う…」

ぎゅ、と手を握り締めて心から礼を言っていると、奏は少し不服そうな顔をしながらも私の友達になってくれたのだった。

さあ、これで名前呼びが出来るぞ!

あれから2週間。私は放課後になると奏の家へ行くようにしている。

それ以外は私の学校生活にこれといった変わりはないが、今日はなんと生徒指導の先生におせんべいをもらってしまった。

嬉しくて、少しスキップしながら奏の部屋まで行く。直した窓から入るのは、もう私の中では習慣になってしまつて、毎回窓から入つていた。

毎回奏は変なものを見るような顔で私を見るが、気にしてはいない。

「生徒会長のくせに先生から何貰つてんだ」

奏に急須とおせんべいを渡すと、もう決まりきつたように彼は急須に茶葉と熱湯を入れ始める。別におせんべいは欲しくてももらつてゐるんじゃないんだが。

「くれるものはしょうがない。それに、今の私は生徒会長ではない。ただの八城くづゆだ」

「へーへー、そうですか」

まるで私が欲しがっているように言われたのが気に食わなくて言い返してみると、小さな子供に対するような態度で返されたので、私は一人でむくれた。

そんな私を見て、奏が笑う。

この頃の私たちは、だいぶ友人らしくなつてきたと自分でも思つていた。

ほうじ茶の入ったコップを受け取りながら、私はあまり重要なことではない風に言葉を紡ぐ。

「ところで奏。今日はちょっとした頼みがある」

「何？」

椅子に座つた奏が問いかけてきて、私は少しためらつてから答えた。

「奏に、…うちの副会長をやってもらいたい」

「…へ？」

思つてもみなかつたことなのだろう。奏は気の抜けた返事を返してきた。

急いで付け足す。

「だ、だめならいいんだ。奏に無理をさせるつもりはないし、仕事は私だけで十分出来てる」

ただ、副会長をやってもらって、もし学校に来たときに一緒に活動したいと思っただけ。

それはちよつと恥ずかしくて口に出来ないまま、私はしばらく無言でいた。

「…ごめん、ちよつと…無理かも」

「そ、…そうか。ならいい」

奏なりに考えてくれたのだから、それで無理なら構わない。私は心配させないように笑みを浮かべると、そのまま茶をすすった。

…沈黙が気まずい。

「え、と…」

気をつかつて奏が口を開いたが、話題が見つからないらしく少し困った顔で目を泳がせる。

そんな奏に、私は立ち上がった。

「か、かなで！」

「え…何？」

少し大きい私の声にびっくりしたのだろう、奏は目を見開いて私を見ている。

「…もう一つ、頼みがあるんだ」

「頼み？」

たった今、ここで思いついた頼みだが。

首を傾げる奏に、少し恥ずかしい思いで私は小さく頼んだ。

「…私の、名前を呼んで欲しい」

「え」

言った後に、これは意外になんというか…恥ずかしい頼みなので、と思う。

…男子に名前を呼んでほしいと頼んでいるわけだから。そう考えた途端熱くなった気がして、私はごにごにと言い訳のようなこ

とを呟いた。

「…私には友達がいなかったから…、名前で呼び合ったりとかしなかったんだ。…だ、だから、奏とは名前で呼び合いたい」

「あ、そ、そっか！…え、と、じゃあ…くづゆ？」

奏が納得したように頷いて、小さく私の名前を呼ぶ。

なんだか心臓がときどきして、すごく嬉しい。

「ありがとう」

「え、あ…まあ、と、友達だしね」

「そうだな！」

奏は良い友達だ、と思いながら笑うと、奏も優しく微笑んでくれた。

そんなことがあった次の日の放課後。私は先生に呼び止められた。

「八城」

「はい？」

振り返ると、先生が書類の束を持っていた。仕事だろう。

「これ、頼めるか？まだ机の上にあって、しかもこれ1クラス分だから同じようなのが6束あるんだが」

「…大丈夫です」

心配そうにいう先生に頷いて、私はその書類の束を受け取った。

丁度私の顎の辺りまである紙の束。

受け取った私に、先生が言う。

「今回ちよつと厄介な書類だから、時間かかってもいい。あとの書

類は、俺が運んどくよ」

「分かりました。それでは」

たかが紙とはいえこれだけ集まると重量もすごい。私は若干汗を

かきながらそれを生徒会室まで運んだ。

ちよつと厄介な書類…と言っていたが、どういう意味だろう。不思議に思いながら書類を見た私は、その意味を理解した。

生徒一人一人別々の手続きが必要なものらしい。今までもこういう書類は少しあったが、…全クラス分のは初めて見た。

この分だと、今日からはしばらく奏のところへは行けないだろう。

「…早く終わらせるべきだな」

奏と会えないのは寂しいから。

ふう、と1つ息を吐いてから、私は自分に気合を入れてその書類を片付け始めた。

そうして、かれこれ五日ほど過ぎている。

書類は学校だけでは終わらず、家に持ち帰って夜までやって、やっと一日に一クラス分終わる、と言った感じた。

さすがに疲れが来ている。…奏は、今どうしているだろうか。

私は奏の連絡先をあいにく知らないの、連絡が出来ていなかった。

きつと心配しているだろう…いや、でも。

「前の生活に戻ってしまうだけだろう…な」

私にとっては奏は大事な友達だが、奏にとってはそうじゃないかもしれないのだ。

勝手に押しかけて、友達になつて、私が会いに行かなければ会えない。

それは思えば当然の話なのだけれど、今の私にとってはそれなりにシヨックだった。

「はあ…」

小さくため息を吐く。そんな時、生徒会室の扉が3回鳴った。来客だろうか。

「…どうぞ」

今は人の相手をする気にはなれない、と思いながら答える。

そうして書類に視線を落とした私は聞こえてきた「失礼しますっ」という声に弾かれたように顔をあげた。

扉を開けて入ってきたのは、奏だった。

「か、かなでっ!？」

少し期待はしていたけれど、まさか。

「くづゆの嘔吐き。仕事出来てねーじゃん」

少し笑って、ちよっただけ馬鹿にしたように行った奏に、私は泣きそうになる。

「大丈夫だ、私は生徒会長だから、出来る」

やっとのことで答えた私に、奏は苦笑していた。

「奏は、どうして…来たんだ? あんなに嫌がってたのに」

生徒会長の席の前のソファに、奏がゆっくり座る。

意外にもすんなりと溶け込んでいて、私は奏が副会長になってくれたらこんな感じかもしれないとぼんやり思った。

「くづゆが、家に来ないから」

「え…」

「来ないから、もういいのかと思って、それで、不安になって、来た」

「…そ、そう、か」

奏が苦笑したまま言う。考えてもいなかった答えに、私は顔が熱くなるのを感じながら誤魔化すように書類へ視線を向けた。

…。

「くづゆ!」

しばらくの沈黙のあと、奏が立ち上がる。

いきなりのにびっくりしながら、私は顔を上げて奏を見つめた。

奏が、少し照れくさそうに小さく呟く。

「僕、副会長やるよ。この前断っておいて、何だけど」

「本当か!？」

「…うん」

少し自信はないけど、と呟きながら微笑んだ奏に私も微笑む。
この日、たった一人だった生徒会は二人になった。

まだまだ奏には大変なことばかりだろうけど、それは私や周りが
サポートすればいい。

一人じゃ出来ないことも、奏となら出来る気がする。
さて、これから色々頑張らなくては！

私はこれからの日々に胸を高鳴らせて、目の前に書類に励んだの
だった。

卒業式に、胸の高鳴りが奏に対する恋愛感情だと気づかされるの
は別の話。

（後書き）

この二人は意外に気に入っているの、もしかしたらちまちま書くかもしれません。

休日とか、仕事中とか…妄想が膨らんだら^^*

文章の書き方は副会長の文とところどころ被せてみました…。
意味無いかも；

【追記】

なんだかあまりにも続きを希望してくださるので…一応連載らしきものを始めました。

『風鈴中学生徒会！』で見つかります。あ、てか一覧で見つかります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4559g/>

頑張れ生徒会長！

2010年10月8日15時22分発行